

デンマークにおけるヒューマンライブラリーの実態調査

野原 愛莉

近年、世界各地で社会的マイノリティに対する理解を深めるための取り組みが積極的に行われている。こうした社会的マイノリティに対する動きが加速する中で、差別や偏見を受けやすい社会的マイノリティの立場にある人が「本」となって貸し出され、読者と1対1あるいは1対数人で「本」と対話するイベントであるヒューマンライブラリーが実施されるようになってきた。ヒューマンライブラリーを最初に開始したのはデンマークであったが、その理由として、1989年に登録パートナーシップ制度を導入する等、デンマークのマイノリティに対する社会的意識の高さが影響していると考えられる。

本研究では、世界各国で開催されているヒューマンライブラリーに関して、発祥地であるデンマークにおける実態を明らかにすることを目的とする。研究対象は、日本では日本ヒューマンライブラリー学会と東京ヒューマンライブラリー協会、デンマークにおいては *Menneskebiblioteket* とし、ヒューマンライブラリーの開催実態について調査を行った。調査方法は、文献調査、ウェブサイト調査、メール調査を用いた。

日本では講座や研修会が数多く行われる一方、ヒューマンライブラリー自体の実施は、デンマークに比べかなり少ないことが明らかとなった。実施にあたっては、ヒューマンライブラリーに関心を持つ地域の人々が立ち上げた団体やヒューマンライブラリーを推進している大学が主体となって開催しているケースが多い。

デンマークでは、*Menneskebiblioteket* において頻繁に開催されていること、ヒューマンライブラリー常設図書館やヒューマンライブラリー・サマーツアーといった新たな試みにも挑戦していることが明らかとなった。コロナ禍においてもイベントの開催回数が減少することはなく、社会の状況に合わせてリアル（対面）とオンラインを使い分けながらイベント開催を続けてきた。

デンマークの公共図書館で実施されているヒューマンライブラリーの活動については、主催者は *Menneskebiblioteket* であり、公共図書館はスペースを提供することと、イベントの進行を支援していた。公共図書館では図書館の理念や目的にヒューマンライブラリーが一致していることを認識した上で、積極的にヒューマンライブラリーの開催に取り組んでいることが明らかとなった。

本研究を通して、デンマークでは頻繁にヒューマンライブラリーを開催しており、新たな形式のヒューマンライブラリーの開催にも取り組んでいることが明らかになった。また、日本でもリアル（対面）とオンラインの併用によってイベントの実施を推進しているが、開催回数は増加していないことも明らかとなった。ヒューマンライブラリーはオーストラリアやアジアでも開催されており、今後、調査対象を広げることで、世界各地で開催されているヒューマンライブラリーの実態を明らかにし、ヒューマンライブラリーの発展のための様々な取り組みを明らかにすることが可能である。

（指導教員 吉田右子）